

I 戦略プロジェクトについて

1 戦略プロジェクトとは何か

平成27年度からスタートした総合計画の基本目標*¹を達成するため、各分野の29施策*²において、それぞれ取組を推進していく一方で、未来に向け、特に重点的・施策横断的に取り組む必要のある課題に対応するため、施策単位での取組を連携させながら事業実施の効果を高め、課題を解決し、基本目標の達成や将来像の実現を目指していく必要があります。

このことから、本市の課題等を踏まえた、重点的・施策横断的な取組を「戦略プロジェクト」として展開します。

取組期間は、おおむね3年を目途に重点を置いた取組を進めます。

*¹ 基本目標

総合計画の基本構想に掲げている「目指す将来像」の実現のため、まちづくりの理念や方向性を表したもの

*² 施策

目指す将来像の実現に向けて取り組む課題を明確にするために、4つの基本目標の下に位置付けたもの。施策毎に目標値を設定するなどして達成度の評価を行います。

2 令和元年度戦略プロジェクト

重点1 「食と農」・「ものづくり」応援プロジェクト

本市の魅力ある農畜産物などの地域資源を活用した取組を進めるとともに、関連する食品関連産業やものづくり関連産業の高付加価値化やビジネス環境整備の取組により産業の振興を図ります。

また、戦略的な企業誘致や企業支援のほか、新たな市場開拓や新商品開発等を目的とした異業種交流の促進により、活力あふれるまちづくりを推進します。

重点2 みんなが支える子ども・子育て安心プロジェクト

若い世代や子育て世代が、希望を持って子どもを産み育てることができるよう、さまざまな保育ニーズに柔軟に対応するための支援を行うなど、子育て環境を充実します。

また、子育ての相談や子どもの健全な成長を支援する体制の充実を図り、盛岡に住み続けたいと思える、安心して子育てのできるまちを実現します。

重点3 2020あつまる・つながるまちプロジェクト

本市を訪れる旅行客が満足し、選ばれる観光地域となるため、歴史や自然、文化などの恵まれた観光資源を生かし、ブラッシュアップするとともに、国内外からの観光客受入態勢の整備を進めるほか、様々な媒体を通じ、本市の魅力を積極的にプロモーションします。

また、ラグビーワールドカップ2019™や東京2020オリンピック・パラリンピックの機運を高め、ホストタウン事業などに取り組むとともに、MICE（マイス）の誘致や盛岡ファンづくりを推進するなど、交流人口を増やし、魅力があふれるまちづくりを推進します。

Ⅱ 戦略プロジェクト評価について

1 戦略プロジェクト評価は何のために行うのか

戦略プロジェクト評価は、各戦略プロジェクトが目的や目標に対し、どの程度達成されたか等の視点により評価するとともに、ロジックモデルシートを活用した戦略プロジェクトと構成事業の関係性や成果の顕在化についても評価しています。

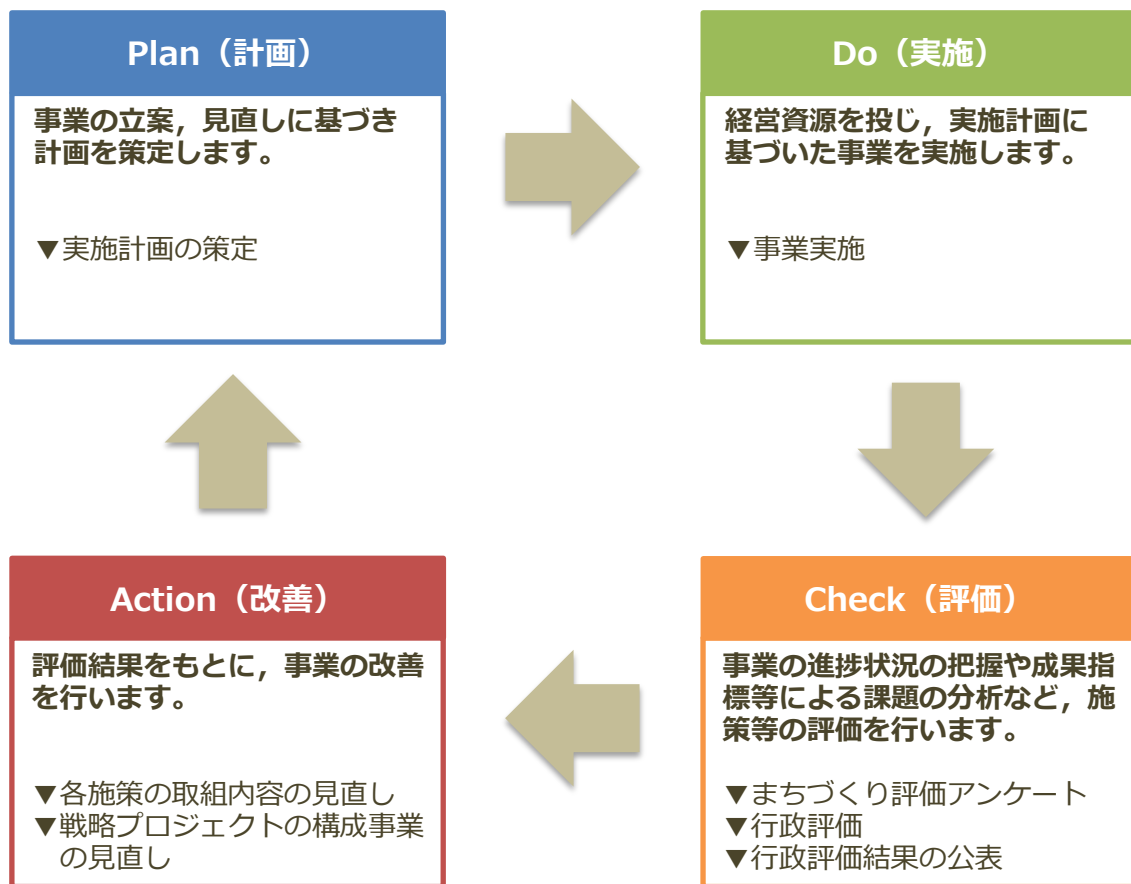
なお、評価シートでは、戦略プロジェクトの目標値に対する実績値の推移をグラフ化して表すとともに、実績の評価を踏まえた今後の展開についても示しています。

戦略プロジェクトは、設定した取組期間内において目標を達成することが求められていることから、前年度の実績を踏まえながら当該年度の評価時点における進捗状況評価（事中評価）を実施することで、戦略プロジェクトの着実な推進を図ります。

2 どのような仕組みか

計画（PLAN）→実施（DO）→評価（CHECK）→改善（ACTION）の循環（マネジメントサイクル）を確立し，市の行政活動について絶えず振り返りを行うことにより，次年度以降の企画の立案や予算編成に反映させていく仕組みです。

○総合計画の進行管理



3 評価結果を何に反映させるのか

戦略プロジェクト評価の評価結果は，今後の戦略プロジェクトの推進や構成事業の見直しに活用するとともに，戦略プロジェクトの期待する効果の実現に向けて特に高い効果が得られる事業に対し，重点的に予算を配分するなど，予算編成に活用することとしています。

(余白)

戦略プロジェクト評価シートの見方

【戦略プロジェクト評価(令和元年度)】

戦略プロジェクトの概要

戦略プロジェクト名	「食と農」・「ものづくり」	戦略プロジェクトに取り組む背景	戦略プロジェクトの取組の内容
期待する効果	産業の魅力・活力があふれるまちになる	「食と農」・「ものづくり」がどれだけ盛岡に残り、定住してもらえるのかという課題があり、この課題を解決するためには「やりがいのある仕事」「安定した雇用形態」「相応の賃金」といった雇用の質を重視していく必要がある。また、雇用維持・創出することを目指す。	本市の魅力ある農畜産物などの地域資源を活用した取組を進めるとともに、関連する食品関連産業やものづくり関連産業の高付加価値化やビジネス環境整備の取組により産業の振興を図る。また、戦略的な企業誘致や企業支援のほか、新たな市場開拓や新商品開発等を目的とした異業種交流の促進により、活力あふれるまちづくりを推進する。
重点取組期間	平成29～令和元年度	戦略プロジェクトの中心事業を所管する部を「主管部」、主管部の部長を、「戦略プロジェクト統括マネージャー」としています。	意図(対象をどのようにしたいのか)
主管部名	商工観光部・農林部	対象(誰(何)を対象として行うのか)	農畜産物の6次産業化により販売額が一定水準に達する。 製造業の高付加価値化が図られる。
戦略プロジェクト統括マネージャー	小笠原 千春 商工観光部長・長澤 秀則 農林部長	戦略プロジェクトの進捗状況を客観的な数値で表した指標を設定し、目標達成度を評価する判断材料としています。	

目標指標の状況・評価(令和元年7月時点)

実績値の推移			実績の評価	
指標	単位	「指標の目指す方向」に向けて特に寄与している点	特に寄与している点の要因分析	
指標① 農畜産物加工品販売額	百万円	「指標の目指す方向」に向けた問題点	問題点の要因分析	
当初値(H27) 18	R1目標値 27	「指標の目指す方向」に向けた問題点	問題点の要因分析	
			<p>「ア」は実績値を上げていくことを、「ナ」は実績値を下げていくことを、目標とするものです。</p>	
指標② 製造業粗付加価値額	千万円	「指標の目指す方向」に向けて特に寄与している点	特に寄与している点の要因分析	
当初値(H27) 4,209	R1目標値 4,377	「指標の目指す方向」に向けた問題点	問題点の要因分析	
			<p>指標の実績値の状況を踏まえ、指標の目指す方向に向けて特に寄与している点・問題点を記載し、その要因を分析しています。</p>	

今後の展開(評価時点～令和2年度)

評価を踏まえた今後の取組
<p>☆1 販売額が好調な「盛岡りんご」は、「もりおかの食と農バリューアップ推進戦略」に基づくアクションプランを確実に実行し、さらなる販売額の増加を目指すこととする。</p> <p>☆2 平成30年度に岩手中央農協が盛岡りんごのカナダ輸出を開始したが、今後は、他団体においても輸出拡大の機運が醸成され、取組が加速されると考えられる。このため、農業団体等による盛岡産農畜産物の輸出を支援する指針を策定し、側面的支援による販路拡大を目指す。</p> <p>☆3 販売額が好調な「もりおか短角牛」は、「もりおかの食と農バリューアップ推進戦略」に基づくアクションプランを確実に実行し、さらなる販売額の増加を目指すこととする。また、もりおか短角牛の振興を図る取組を引き続き実施する。また、春から夏にかけて不足するもりおか短角牛の供給量の確保を図るために、引き続き、肥育農家に対する子牛購入経費の一部を助成する。</p> <p>☆4 「アロニア」「行者にんにく」は、アンバサダーによる新たな商品開発・販売促進活動の効果が現れていることから、引き続き、販売額の増加に向けた取組を推進する。</p> <p>☆5 「津志田芋」は、生産者団体に属する担い手の減少に伴い栽培面積も減少していること、また、津志田芋を原料とする焼酎の在庫切れが生じ、このことがアンバサダーメニューの製造にも影響が及ぶと考えられるため、関係団体からの情報収集を行った上で対応を検討するとともに、盛岡特産品ブランド食材における津志田芋の今後のあり方など、次期戦略の方向性を検討する上での課題の洗い出しを行う。</p> <p>☆6 担い手不足に対応するため、盛岡産農畜産物の生産量拡大の一端を担う新規就農者の確保と育成に向けた支援を引き続き行う。</p>
<p>左欄の要因分析を基に、今後必要となる展開を記載しています。</p>
<p>☆1 新産業等用地の整備を進める。道明地区の準工業地域のうち、第一事業区については、令和3年2月までに整備が完了するよう、関係各部署との調整を行い、事業の円滑な推進を図る。</p> <p>☆2 地場企業を含め、新設・拡充・移転等の意向把握に努め、早期の売却を図り、操業環境や生産性の向上を目指す。</p> <p>☆3 成長分野の地域未来牽引事業者の成長を促し、高付加価値を生み出すことが出来る製造業の集積を図る。</p>

戦略プロジェクト ロジックモデルシートの見方

- ロジックモデルとは、ある施策がその目的を達成するに至るまでの論理的な因果関係を明示したものです。
- 戦略プロジェクトにおけるロジックモデルシートは、各事業がどういった論理（ロジック）で戦略プロジェクトの期待する効果に至るのか、その過程を、数段階（活動、結果、一次成果、二次成果、三次成果）に分割して表現しています。つまり、活動から右へ順に、時間の経過にともなう成果の流れを表しています。
- ロジックモデルシートを作成するにあたっては、経験と事業実績に基づいて、「こうなることによってこうなる、その結果こうなる・・・」という論理の流れを考えます。このような論理的な根拠を持ったより良い仮説を立てることが、より有効性の高い事業をつくりだすことにつながると考えています。また、毎年このロジックモデルを検証し、見直すことによって、戦略プロジェクトの期待する効果の達成を目指します。

ロジックモデルシート(令和元年度評価/令和元年7月作成)

[重点1] 「食と農」・「ものづくり」応援プロジェクト

